

満洲を見せる博覧会*

山路 勝彦**

明治期以降、日本で開かれてきた数々の博覧会のなかで、きわだった特徴を一つ挙げれば、台湾、朝鮮、満洲など、新たに組み込まれたこれら帝国の植民地においても博覧会が開催されたことを言うべきであろう。これら植民地は、むしろ日本で開催された多くの博覧会にも参加し、植民地の社会的・経済的立場を高めようと努力を怠っていなかった。

日露戦争後に日本の租借地となった関東州とその中心都市の大連、さらに昭和になって成立した満洲国は、機会のあるごとに日本での博覧会へ参加してきた。この満洲国はさらにアメリカのシカゴで開催された万国博覧会にも参加している。そして、ご当地、大連でも本格的な博覧会を開催している。興味あることに、それぞれの博覧会で満洲が見せる表情は異なっている。日本で行われた博覧会に出場した時は日本に対して豊富な資源の供給国としての姿を見せ、シカゴに登場した時は独立国としての威厳を見せようとする。これに対して、満洲で行われた時は日本各地から参加した数多くの出品者に伍していけるように自己を表現する。

ここで取り上げる主題は、一連の博覧会を取り上げ、そこで植民地満洲はどのように自己を表現しようとしたのか、ということに関してである。植民地・満洲で実質的権力を掌握していたのは日本人であるが、その日本人が母国・日本に対して向ける態度、国際社会へ向ける態度、自国内の人々に向ける態度、これらは少しずつ異なっていた。植民地・満洲では日本人が在地の住民に対して実質的な支配者として君臨していたとはいえ、中央の日本人からすれば満洲は辺境にしかすぎなかったもので、自ずと中央の眼を意識した劣等感

拭い切れなかった。日本人であることを楯に植民地住民に対しては優越感を持つとともに、こうした抑圧された意識のもとで博覧会の主催者はどのようなメッセージを発信していたのであろうか。本稿はそれぞれの博覧会で示した態度の違いに焦点を合わせ、満洲に関わる博覧会の特色を記述する試みである。

1 植民地からの博覧会参加

昭和12年3月から5月にかけての78日間、名古屋開港30周年を記念し、かつ貿易都市としての名古屋市の躍進を称え、名古屋市主催のもとで名古屋汎太平洋平和博覧会が開催された。太平洋に面した諸外国、29ヶ国が参加し、盛大に行われたこの博覧会こそは、日本最初の国際的博覧会と言えるものであった。

この博覧会場には「外国特設館」が設けられ、そのなかの一角には「満洲館」がいつものように参加していた。満洲館は満洲国、関東庁、満鉄（南満洲鉄道株式会社）の共同出資のもとで建設されたもので、パノラマ、ジオラマをはじめ立体的に館内展示を試みることで注目を集めようとしていた。国家として成立をしたものの、国際的な承認で問題を残していた満洲国が国家の存在意義を求めて参加したのがこの博覧会であった。現代の博覧会のようにおおがかりで機械じかけの展示はないものの、館内展示の配置を見れば、満洲館が参観者に何を伝えようとしていたのか、一目瞭然として分かる。以下のように、出品項目を例示してみたい。

1 日満提携、2 大連港と貿易、3 満洲物産

*キーワード：植民地、満洲、博覧会

**関西学院大学社会学部教授



第1図 名古屋汎太平洋平和博覧会の宣伝パンフレット
これは会場で配られた「満洲館」の宣伝パンフレットの一部である。 出典：山路所蔵品。

陳列、4 満洲井戸、5 紙芝居、6 満洲物産陳列、7 塩業、8 林業、9 油坊と農畜産、10 日滿商事会社出品、11 撫順炭砒と製油業、12 昭和製鋼所、13 観光の満洲、14 移民、電気事業、15 満洲物産陳列、16 国都建設、17 大連汽船会社出品、18 現勢模型

この一覧表を見て分かるように、満洲の物産、とりわけ天然資源の豊富さを引き立たせる内容が博覧会での展示の中心であった。満洲は豊かな資源の眠る大地であり、近代工業の発展に欠かせない物資の貯蔵庫として描き出すこと、これこそが満洲館の展示目的にほかならなかった。「満洲の石炭」、「オイルシエール（油母頁岩）工場」、「石炭液化工場」、「満洲の油坊」、様々な展示品のなかでも満洲原産の鉱山資源の展示がひときわ目につく。それは、一口で言えば、ひたすら「重工業と満洲」を印象づける内容であった。

会場内で配布されていたパンフレット（第1図）はその事実を言い当てている。そればかりか、日本と満洲とを対比させることで満洲の資源の豊かさを強調するとともに、日本と満洲とは唇齒輔車の関係にあると参観者に訴えかけている内

容になっている。そのパンフレットの文面には、日本の植民地としての満洲の姿が表現されている。次のように、文言を整理してみたい。

狭い日本	：	広い満洲
人口過大の日本	：	人口過小の満洲
資源貧弱な日本	：	富源の満洲
工業国日本	：	原料供給国の満洲

このパンフレットには、ほかにも満洲の観光地の紹介もされている。それは満洲の三温泉、すなわち、熊岳城温泉、湯崗子温泉、五龍背温泉の紹介であり、温泉好きの日本人目当ての宣伝であることは言うまでもない。明かに、この満洲館の展示の主題は日本人のために満洲の存在意義を見せることにあった。それだから、「日本の将来に光明を点ずる満洲の実相は満洲館に示現されて居る」という謳い文句で、このパンフレットは締めくくられたのである。

名古屋汎太平洋平和博覧会でみたような満洲展示は、古くは大正元年10月から11月にかけて東京上野公園で開催された拓殖博覧会にも見ることができる。この時には日本の植民地として異域の人が住む朝鮮、台湾、樺太、そして北海道とともに、日露戦争後に日本の租借地になった関東州からの出品も展示された。当時、現在の大連市を含む一帯は関東州と呼ばれ、その行政官庁として関東都督府が設置されていた。拓殖博覧会には、その関東都督府と満鉄（南満洲鉄道株式会社）との共同経営のもとで、満洲式楼閣に粉飾された建築様式の「満洲参考館」が設けられ、ここに満洲を展示する機会が日本博覧会史上はじめて出現したのである。

この満洲参考館は、日露戦争の勝利にまだ酔いしれていた、当時の日本人の心を大いにくすぐったに相違ない。日露戦争は多くの将兵の犠牲を伴っただけに、戦死者の顕彰は国家をあげての重大な儀式を必要とし、国民的悲願として戦争記念碑が激戦地の二〇三高地に建立された。こうして悲惨であった戦場は敬虔な場所に変わり、戦跡は聖地として人々の記憶の装置に埋め込まれていった。拓殖博覧会での展示物にも、こうした戦場の記憶は反映されている。館内には、激戦地で

特産物：大豆系統品、柞繭系統品、関東州塩。

農産物：高粱をはじめとして70種。

鉱業品：撫順炭、鉱物標本。

窯業品：耐火煉瓦。

諸工業品：セメント、葡萄酒。

蒙古品：革製品。

大正末から昭和にかけての博覧会では満洲からの展示はいちだんと整えられ、展示会場は厚みを増していく。大正14（1925）年3月、大阪毎日新聞社が主催し、大阪市後援のもとで開催された大大阪記念博覧会は、人口が200万を超え、世界有数の商工業都市となった大阪市の発展を記念して行われたものである。折から、大阪毎日新聞は一日の発行紙数が100万を突破し、創刊以来1万5千号に達するという記念すべき業績を上げていた。

この博覧会では、大阪市が鳥瞰できるパノラマ館、大阪市の変遷を語る都市館、豊臣秀吉に関する参考品を展示した大阪城内の豊公館など、大阪を見せるための仕掛けは手が込んでいた。特設館として台湾、朝鮮の植民地からの出品が見られたほか、満鉄および関東庁からの特設館としては「大陸館」が設けられていた（大阪毎日新聞社編1925：440-42）。その出品として満蒙のあらゆる生産品、すなわち、農産物、林産物、鉱産物、工業製品など120種、数百点あまりが並べられたけれども、そのなかでも、とりわけ人目を引いたのは、撫順炭砒から運ばれた、巨牛の蹲ったような巨大な石炭であった。豊かな地下資源という謳い文句は、もはや誰の目にも疑えない事実として映し出された。満蒙の地がだだっ広だけの土地としか考えない無関心な人に、満蒙の実情を伝えようと意気込んでいたのであろうか、日本の米の成長が満洲の豆粕肥料によっていること、鉄、石炭、塩、羊毛などの生活必需品の多くが満蒙生産品によっていること、こうしたことを伝える機会として博覧会は利用されたのである。

さらに館内には、日露戦争で戦死した将兵を祀る旅順の表忠塔を模して、満蒙特産の穀類十種を利用して作られた背の高い塔が建てられた。この会場もまた戦跡記念館として位置づけられていて、参観者は直接に大陸の戦場跡に行かなくても、この博覧会場で戦時の昂揚ぶりを追憶するこ



第4図 「高脚踊」の光景（絵葉書）

出典：山路所蔵品。

とができた。

博覧会につきものの余興の面でも、大大阪記念博覧会は異彩を放っていた。4月2日から6日間だけとはいえ、大陸の大連から「高脚踊」をみせるため、30人もの踊手一行を招待したのである。高脚踊とは、祭礼などに登場する練物行列の名称である。それは、各々が3尺ほどの丸太の足駄を履き、手に手に漢式楽器を鳴らしながら、旗、幟、大ラッパを先頭に、手振り足取りも楽しげな所作で、行列をなして市中を練り歩く踊のことである。こうした光景を目撃した沿道の人たちは異国趣味に捕われたことであろうし、視角を通して満洲の存在はいつそう宣伝されることになったはずである。

昭和にはいつての満洲展示は、日本国家が満洲の植民地経営に深く関わっていく時代状況に深く関わっている。昭和3（1928）年9月、昭和天皇の即位を記念して京都市が主催した大札記念京都大博覧会では、豊かな満洲を見せようとする試みが繰り広げられた。会場に設けられた満蒙参考館では満洲農産物の紹介が行われていた。「大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麦、大麦、緑豆、米、硬化大豆油外、黄麻製品、醤油・味噌、葦製安平、綿糸十六手・二十手、麻袋・麻布及帆布類、粗布綿糸・綿花、柞蚕綿、紡績糸、紬糸」などの農産品、羊毛、毛織物各種などの畜産品が展示され、日本との経済的関係が強調されていた。もちろん満洲経済の基本をなす重工業の展示にも力が加えられている。金、鉄、石炭などの満蒙重要産品は分布図で示され、有名な撫順炭鉱は縮尺八百分

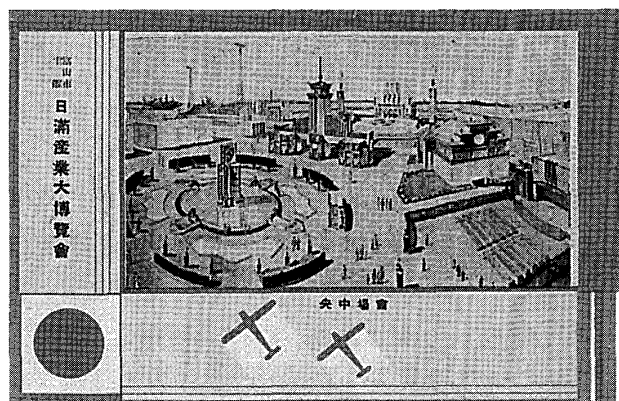
の一の模型で表現された。鞍山製鉄所、大連港など重要な施設もまた写真展示の対象であった。

こうした展示の目的は明瞭である。主催者側のもくろみは、「一目瞭然開け行く満蒙の文化を知」らせることにあった。そのために多くの模型図を利用し、視角による満洲認識を高めようと努力がなされ、映写機を利用しての満洲描写もまた行われていた。かくして、主催者はこう自賛して言う。すなわち、「同館奥には大きな映写ありて満蒙各都市の状況と開け行く産業の繁栄さを物語り、一々丁寧なるタイトルは満蒙へのあこがれを誘うに充分なり」と（京都市役所 1929：117-18）。憧れの満洲を演出する装置として博覧会は利用されていたのである。

さらに一例、憧れの満洲を演出する仕掛けを持った舞台として、地方で行われた博覧会を取り上げておきたい。昭和11（1936）年4月15日から6月8日まで、富山市主催で日満産業大博覧会が行われたことがある。富山都市計画の進捗に伴い、産業の発達とともに、日本海時代の到来を期して行われたこの博覧会は、同時に、日本海は満洲との交通、産業、貿易上の活動舞台であるとの認識で、富山市と満洲との貿易の振興を求めて行われた（富山市役所 1937）。

この博覧会には、東京、京都、愛知などの都府県からの特設館があり、朝鮮館、台湾館の参加もあり、この他にも演芸館、海女館、電気館、農機館などが設けられていたし、また外国余興場として万国街が造られたほどであって、地方都市での開催とはいえ本格的な博覧会と言えるものであった。このなかでも、日満記念館は、「建坪は67坪、中央に高さ60尺の満洲様式の搭屋を設け、華麗な歓迎門様式の建物で、全面的に満洲趣味模様を巧みに配し」（富山市役所 1937：181）たほどの立派な建物であった。主催者側が、「これは館というよりも搭といった方がよく、日満の交驩を象徴する一大装飾搭で会場美化の効果的建物」（富山市役所 1937：288）と自画自賛するほどの外観であった。

日満産業大博覧会を名乗るだけあって、産業をめぐって日満間の密接な関係を主題に据えた博覧会ではあったが、この会場にはそれ以上にきわめて政治的宣伝臭さが漂っていた。昭和7年、日満



第5図 日満産業博覧会の会場風景（絵葉書）

出典：山路所蔵品。

議定書の調印という歴史的事柄に合わせ、満洲帝国の正統性をはっきりと訴えるため、その調印式の情景が等身大の人形を用いて再現されたのであった（富山市役所 1937：388-393）。このように、満洲をめぐる展示は政治的であった。さらに付け加えておくべき光景がある。満洲国は「五族協和」を謳い文句にして国家の正統性を説いただけに、この五族協和という掛け声は様々な機会を通じて宣伝されていた。この博覧会もまた、例外ではなかった。等身大の人形を用いて、「日、満、漢、蒙、露」の五族の少年少女が和やかに遊び語る場面が麗はしく描かれていたことに、満洲に関わる博覧会の特徴があった（富山市役所 1937：390）。

日満産業大博覧会で主役を演じた満洲館は、満洲国、関東局、満鉄の三者共同の設営であった。その建物は二階建て寄棟造りで、楼阁風の満洲様式の建築であったし、内部の装飾もまた満洲色を豊かに表したものであった。展示品はすでに馴染みになった内容で、満洲の産業と暮らしを見せる内容であり、「奉天国立博物館出品物」「満洲現勢模型」「柞蚕糸標本」「石炭煤（撫順炭坑の模型）」「製鉄」「国都新京（ジオラマ）」「都市風俗」「満洲井戸」「日満連絡航路」「満洲物産」「林業模型」など、一通りの内容は網羅していた。だが、展示はこれだけに留まらなかった。圧巻は「満洲大観」と題された大場面の登場であり、そこにはのどかな大陸を賛美する情景が克明に描かれていた。「満洲大観」の大場面について、次の解説文を読んでもみると、「赤き夕陽に照らされた大地」への憧憬が呼び起こされる（富山市役所 1937：554）。

精巧豪壮な仕組を誇る間口八間の大場面——
 広漠な原野、見渡す限り只一面の草原に、輝か
 しい大陸の陽を浴びて、羊の群が長閑に戯れ、
 高粱を縫って汽車が見え隠れに過ぎて行く。大
 豆のとりいれ、白の綱を引く騾、鞭を手に家畜
 を追う農夫ののんびりした姿、地平線の彼方に
 消える果てしなき針葉樹林、木陰に憩いをとる
 隊商のテントなど、悠久の大自然に、やがて
 真っ赤な夕陽が沈んで行く。羊も農夫も夕やけ
 に染まり、森の上には明星が輝き始める。

日本で開催された博覧会に登場する満洲は、豊
 富な地下資源を持つ豊かな国土であると同時に、
 日本人に対して満洲ロマンとも言うべき情念をか
 きたてる存在でもあった。「赤き夕陽」という絵画
 的に語られる情緒豊かな満洲、これぞ日露戦争へ
 の追憶を呼び起こし、日本人の魂を揺さぶる情念
 に満ちた満洲表象であった。しかし、それは、軍
 歌「戦友」を通して日本人の馴れ親しんだ情緒的

観念の焼直しにすぎなかった。

2 「進歩一世紀市俄古^{シカゴ}万国博覧会」にお ける満洲

1) 日本館と東洋趣味

戦前、日本で行われた主要な博覧会には台湾、
 朝鮮とともに満洲国は常に参加していたが、その
 満洲国は海を越え、太平洋を跨いで海外の博覧会
 に参加した経験を持っている。その舞台は、1933
 年5月27日から170日間にわたり、市制施行100年
 を記念して、アメリカのシカゴ市で開催された
 「進歩一世紀市俄古（シカゴ）万国博覧会」で
 あった。

シカゴでの最初の万国博覧会は、コロンブスの
 アメリカ大陸到達400年を記念して1893年に開催
 された。その時の会場は白色で統一され、噴水や
 水車の登場で話題を賑わした博覧会であった。そ
 れから40年が経過し、シカゴは再び博覧会場の場



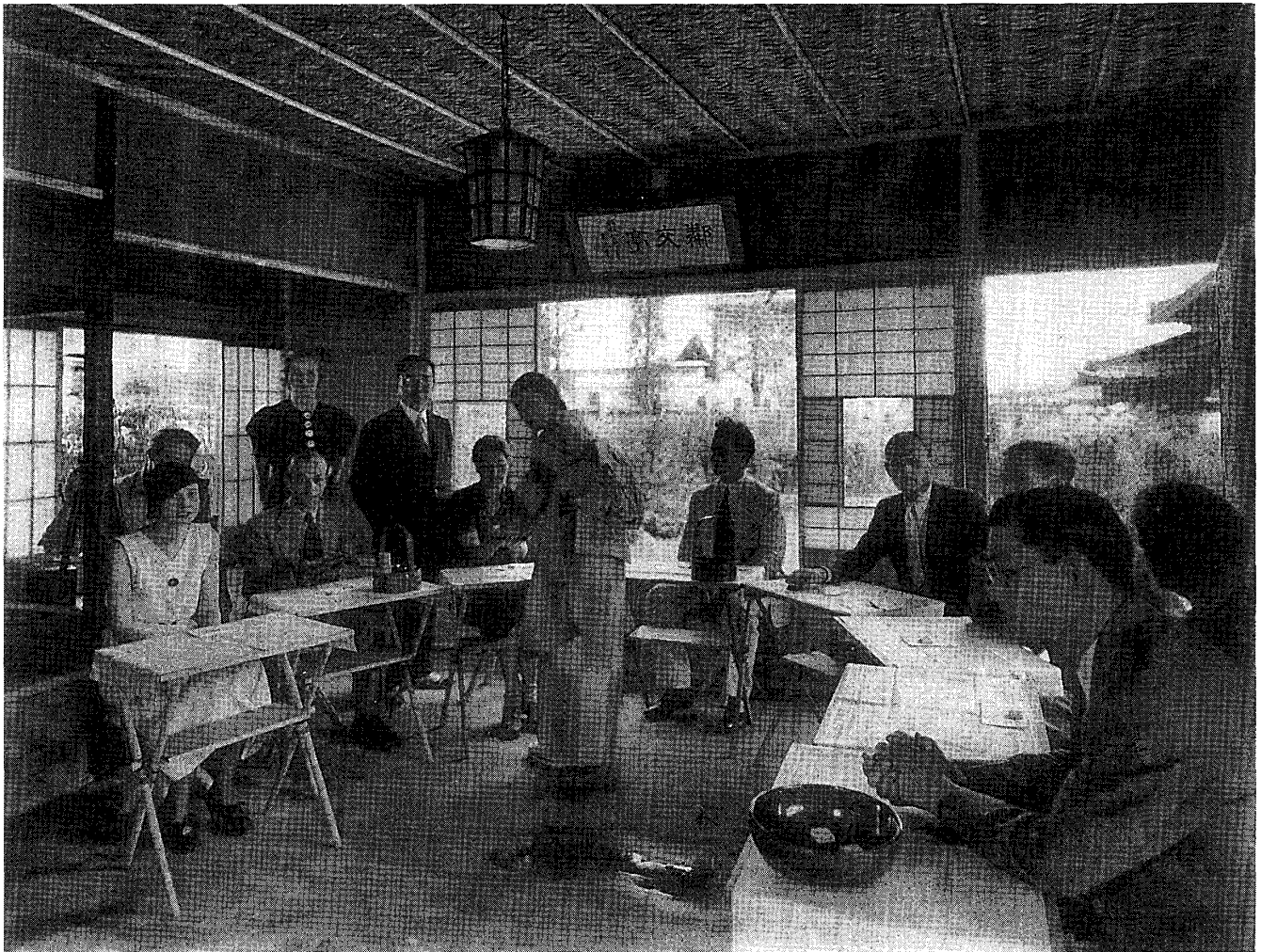
第6図 「進歩一世紀市俄古万国博覧会」での余興（1）

博覧会では余興として各種の見世物が出現した。

左側：ゴリラが女性を抱えている場面

右側：アフリカ人の火渡り。傍らに頭骨（模型）が置かれ、「珍奇なる人種」を演出させていた場面。

出典：山下清秀編 1934。



第7図 シカゴ博覧会での「茶の湯」の光景

この写真は7月8日の「日本デー」に際して行われた茶の湯接待の光景である。

出典：加藤徳三郎編 1934（口絵写真）

になった。1933年のシカゴ万国博覧会は科学の進歩を主題にしていて、アーキテュラスの光を応用した建築照明が話題をさらい、「色彩と光線の博覧会」とまで称賛を浴びたほどで、「進歩一世紀」という共通の主題を掲げて行った博覧会にふさわしい光景がここかしこで見ることができた。その一方で、当時の博覧会でよく見かけるような、珍奇な催物もまた登場した。「ゴリラと美女のダンス」があり、「小人国と大人国」の見世物があり、そしてアフリカ人を下等視する出し物が繰り返し行われていた。なかでも、骸骨で囲った狭い空間の中で灼熱の炎の上を歩くという出し物は、アフリカ人の未開性を強調する以外の何物でもなかった。

こうした華やかさと珍奇さを合わせ持った博覧会であったが、ウォール街を襲った株式大暴落の

傷がまだまだ癒えなかつただけに、参加国は予想以上に少なく、日本、アメリカ合衆国、イタリア、スイス、ノルウェー、チェコスロヴァキア、中華民国、エジプト、スペイン、モロッコ、カナダ、アイルランド、ドミニカが参加したに留まった。イギリス、ドイツ、フランスなどは政府としては不参加で、民間企業が参加したにすぎなかった。アメリカ各州から大規模な出品があったことは当然とはいえ、世界全体を覆っていた不況の波はこの博覧会にも深刻な影響を及ぼしている。日本とアメリカを除いては、経費節約を図るためか、建築外観の美に比して規模と内容において出品展示の内容は伴わなかったという評価がみられたほどであった（河原茂太郎編 1934：51）。

日本からの出品には陶磁器や工芸品、そして日本観光を誘う風物の模型などが並べられていたほ



第8図 シルクデーでのファッション・ショウ

絹の和服をアメリカ人が着用している場面。

出典：長岡哲三編 1934（口絵写真）

か、ジャポニズムを引き立たせる仕掛けも用意されていた。その代表は茶業組合中央会議所が主役を担った緑茶の宣伝であった。日本館の建物自体が純日本風の建築様式であったうえに、純和式の庭園も設えられていて、このことがアメリカ人の興味をひいたが、それとともに緑茶を嗜む機会も設定され、茶の湯の実演を見学できたように、緑茶の宣伝には用意周到であった。日本館別館には喫茶室、庭園の一隅には茶室が設けられ、会期中には毎日午前と午後の二回、「茶の湯」が実演されていた。ここで参観者たちは茶道の説明を受け、遠い国、日本への異国趣味を堪能できたわけである。とりわけ、8月25日は「日本茶デー」とし、喫茶店には茶席が開設され、日本茶がふるまわれ、茶道の紹介と宣伝が行なわれていた（日本緑茶販路拡張聯合特別委員会 1934：31-34；312）。その日こそは、アメリカ人の「東洋趣味」をくすぐる好奇の目があまた注ぎ込まれた一日でもあった。

絹織物や真珠という特産品も日本館の目玉商品であった。当時、日米貿易の花形であった絹製品もこの博覧会では主役の一人であった。日本中央蠶（蚕）糸会是对米生糸輸出の現況を意識し、宣伝の場とするためにこの博覧会を恰好の標的と定めたのである。こうして、刺繍や衣服をはじめとした絹製品の展示が会場を飾ることになった。会期中の8月19日は「生糸日」とされ、日本中央蠶

糸会主催による生糸の宣伝が試みられた。「生糸日」当日、日本館入場者には絹手巾を配布し、またサンフランシスコの衣装業者によって絹布のファッション・ショウも奏でられた（河原茂太郎編 1934：311-12）。

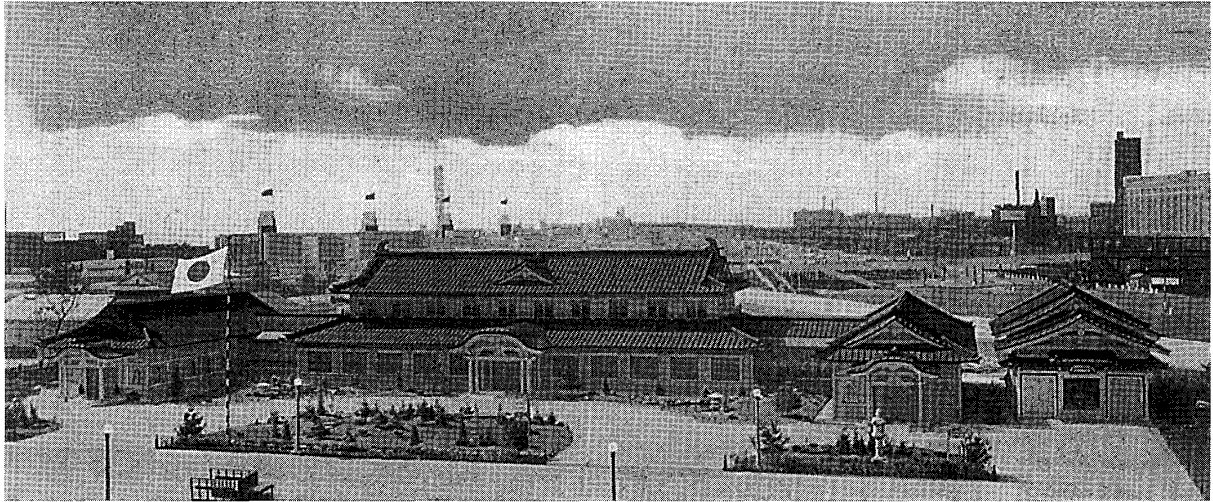
御木本真珠もまたこの博覧会の機会を巧みに利用し、自社製品の宣伝に力を注いだ企業の一つであった。初代大統領ワシントンの家の模型を真珠と白金で製作し、観衆の瞠目を開いたのである。数万の真珠で飾り立てられたこの豪華品は、博覧会終了後、スミソニアン博物館に寄贈されたというから（河原茂太郎編 1934：288）、かなり貴重な作品であったと言える。さらに、7月23日を「真珠日」と設定し、入場者には抽選で100名に真珠を贈呈し、積極的に宣伝に努めるなど、この博覧会への意気込みは強かった。

かくして、シカゴの進歩一世紀万国博覧会での日本館の活動は派手で、また活力の富んだ内容にもなっていた。だが、こうした観衆の喝采を浴びた日本館の片隅には、一つの奇妙な建物もまた並んで建てられていた。これが南満洲鉄道株式会社（満鉄）の出資した「満鉄館」である。それは、実質的には満洲を代表する「満洲館」であった。

2) 満洲国の参加

日露戦争後、大連を拠点とした関東州を足がかりに大陸支配に乗り出した日本は、昭和6（1931）年に満洲事件をおこし、翌年、1932年に愛親覚羅・溥儀を皇帝にかついで満洲国を樹立した。それは、シカゴでの進歩一世紀万国博覧会が開催される一年前のことであった。この博覧会の開催準備が始まった当初から、満洲国は参加への道を探っていた。アメリカをはじめ多くの国家が満洲国の独立を承認しないにも関わらず、満洲国が博覧会への参加を決意した背景には、国際政治との関係を見据えての事情があった。それは、容易に予想されるように、「満洲国の実際を全世界に知らしめ、建国の理想を充分認識せしむると同時に其の産業風俗等を紹介する絶好の機会」（山下清秀編 1934：4）と考えたからにはほかならなかった。

しかしながら、満洲国の存在を世界に訴えたいという願望にも関わらず、博覧会への参加を表明したとたん、満洲国は継子扱いされる運命に陥っ

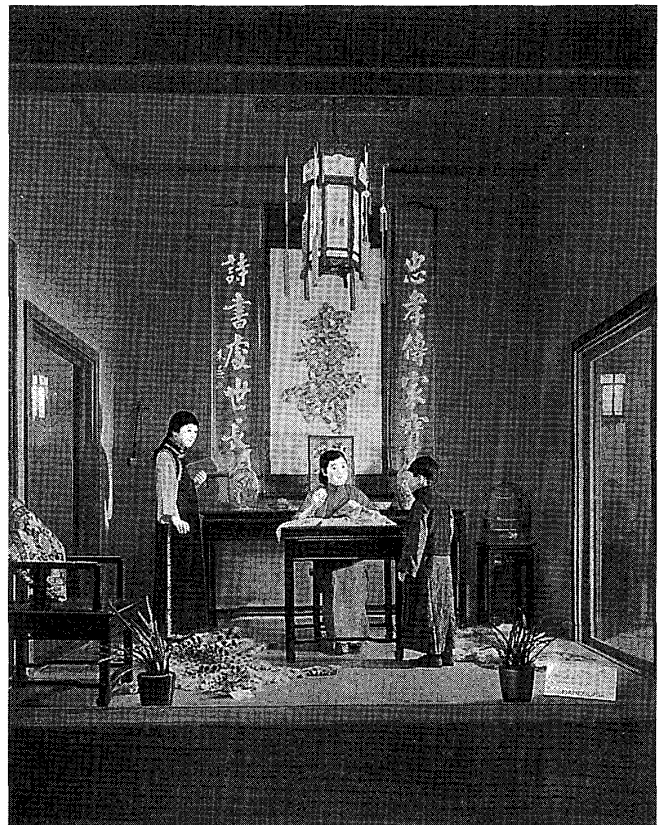


第9図 日本館全景図

進歩一世紀市俄古万国博覧会での日本館。右端の建物が満鉄館である。

出典：山下清秀編 1934

てしまった。国家の支援のもとで、博覧会参加にあたっての出品協会が組織されたのであるが¹⁾、実際には満洲国名義ではなく、満鉄名義での参加という形式にならざるを得なかった実情から、満洲側の苦悩は伝わってくる。この背景には複雑な国際政治の力が働いていた。紆余曲折をみた博覧会への参加の過程はその事情をよく語っている。まず、シカゴで万国博覧会が開かれるとの情報を得た満洲出品協会は、奉天（現・瀋陽市）の米国総領事館から博覧会の機構、役員、規則などの詳しい説明をもらうという作業を行っている。その情報をもとに、関東軍の板垣征四郎大佐（当時）に相談したところ、快諾を見たので、東京に出張し、日本側の責任者と本格的な交渉を行うようになる。その時、東京に出品勧誘のため出張中であつた大会総裁顧問のアルバート博士が日本政府や日本出品協会と相談し、満洲国の出品も要請していたことを知って、自信に満ちて満洲に戻ることができた。満洲では、満鉄会社と満洲国政府の支援を取りつけることができ、名称は「満洲館」とすること、満鉄が9萬5千円、満洲国は15萬5千円を支出すること、満洲出品協会を責任者とす



第10図 満鉄館に飾られた満洲上流家庭の風俗人形

満鉄館に入ると、ただちに日本とは違う風俗習慣が飛び込んでくる。

出典：山下清秀編 1934

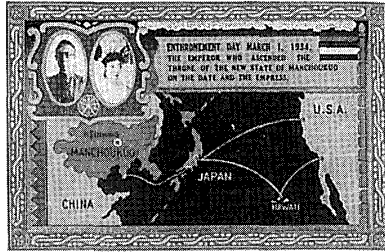
1) 「進歩一世紀市俄古万国博覧会」に参加するにあたり、「満洲出品協会」が設立された。この万国博覧会への満洲国の参加には、八田・満鉄副総裁と板垣・関東軍少将（当時）の果たした役割が大きかった。この二人の意向で、満洲出品協会の会長には満洲国政府実業部総長（大臣）の要職にあつた張燕卿があたり、副会長は商工会議所議員中より選定ということになった（山下清秀 1934：4-5）。実業部とは農林畜産業、商業・貿易などを司る中央官庁であつた。

(二)

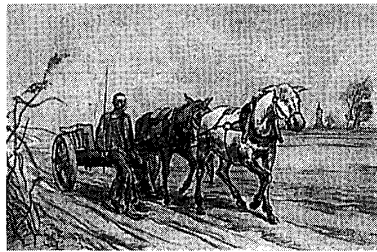


介紹滿洲國之寫真明信片
 農奉天 康德皇帝即位紀念
 夫天麻 人風俗
 晚北 歸陵塔俗

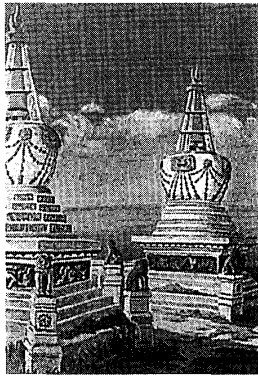
(一)



(四)



(五)



(三)

第11図 シカゴ博覧会で配布された絵葉書

滿洲の歴史的景觀と牧歌的風景を表現している。

出典：山下清秀編 1934

ることなどを決め、博覧会参加は具体化した。

ところが、ここで意外にも外務省から異議が出され、事態は紛糾する。名称を「滿洲館」としたところ、外務当局は、滿洲問題で列国から白眼視されているうえに、未だ承認していない米国で滿洲館を名乗ることの不利を強調したのである。商務省は積極的に参加を主張し、外務当局と対立するが、妥協策として名を捨て実を取る趣旨から、対内的には「滿洲館」という姿勢をとりながらも、対外的には「滿鉄館」を名乗ることとし、かくして「日本館附属滿鉄館」として落ちついた経緯がある（山下清秀 1934：4-5）。

この滿鉄館は日本館の敷地の一角に建てられ、対外政策を意識して日本館の一部であるかのよう



第12図 滿洲国建国を宣伝するポスター

まるで神話的意味を附与するような絵柄である。この写真のキャプションは以下のように日本語と漢語で書かれている。

「油絵ポスター（天意により王道と平和の光明を齎せる意を寓せる）滿洲国誕生の図
 油絵宣伝掛片 滿洲誕生之図（寓意為依處天意而發揚之王道乃和平之光明。）」 出典：山下清秀編 1934

に装ったけれども、展示は日本文化、もしくは日本的なるものとは異なった特徴を印象づけたものになっている。日本内地での博覧会に滿洲国が参加した時の展示品の数々、例えば、滿洲現勢模型、大連埠頭の今昔を描いた油絵、農家の模型、皮革類（狐皮、豹皮、獺皮、貉皮など、21種）の展示が登場するほか、鉱産物、豆餅・豆油などの農産物、そして木材・薬材などがこの一角に並べられていた。だが、これらは日本で開催された博覧会でも登場する品物であって、滿洲の産業の概要を紹介する、あまりにもありきたりの印象を与えているだけにしか見えない。

しかしながら、滿鉄館の正面入口の中央ウィンドウには実物大の滿洲風俗人形が飾られ、日本と差異化された滿洲を印象づける仕掛けに余念がな

い。満洲出品協会としては、満洲と日本との文化的差異化を強調し、政治的には独立した国家であることを見せつけたかったはずである。このため、満洲を特徴づけるポスターや絵葉書が多数、用意された（第11図）。夕方に馬車で畑から帰る光景からは広大な満洲の大地、色彩豊かな衣装をまとった女性からは満洲情緒、チベット仏教や清朝の王宮遺跡からは高文化の香り、絵葉書に描かれたこれらの光景を通して、参観者には茶や生糸、真珠の日本とは対比される満洲の光景を植えつけようと試みたわけである。実際には満（満洲）族は漢化され、漢民族と風俗習慣の差異はほとんどなくなっていたという現実がある。だが、一般のアメリカ人にはそこまでの民族学的知識はないわけであるから、日本との差異化を表象する展示であれば、それでよかったのである。

満洲を表現する展示のなかで、極めつけは満洲国誕生を描いたポスターの登場である。ここに、天上界から一人の男と一人の女が地上を見つめているポスターの絵がある（第12図）。その女の右手には珠が握られ、そこから光がかざされ、その光が達している地上が満洲である。満洲国は神々から祝福され建国された国家であることを象徴的に言い表したポスターであり、この絵は世界に向って満洲国の独立を宣言する国家のもくろみを表現していた。

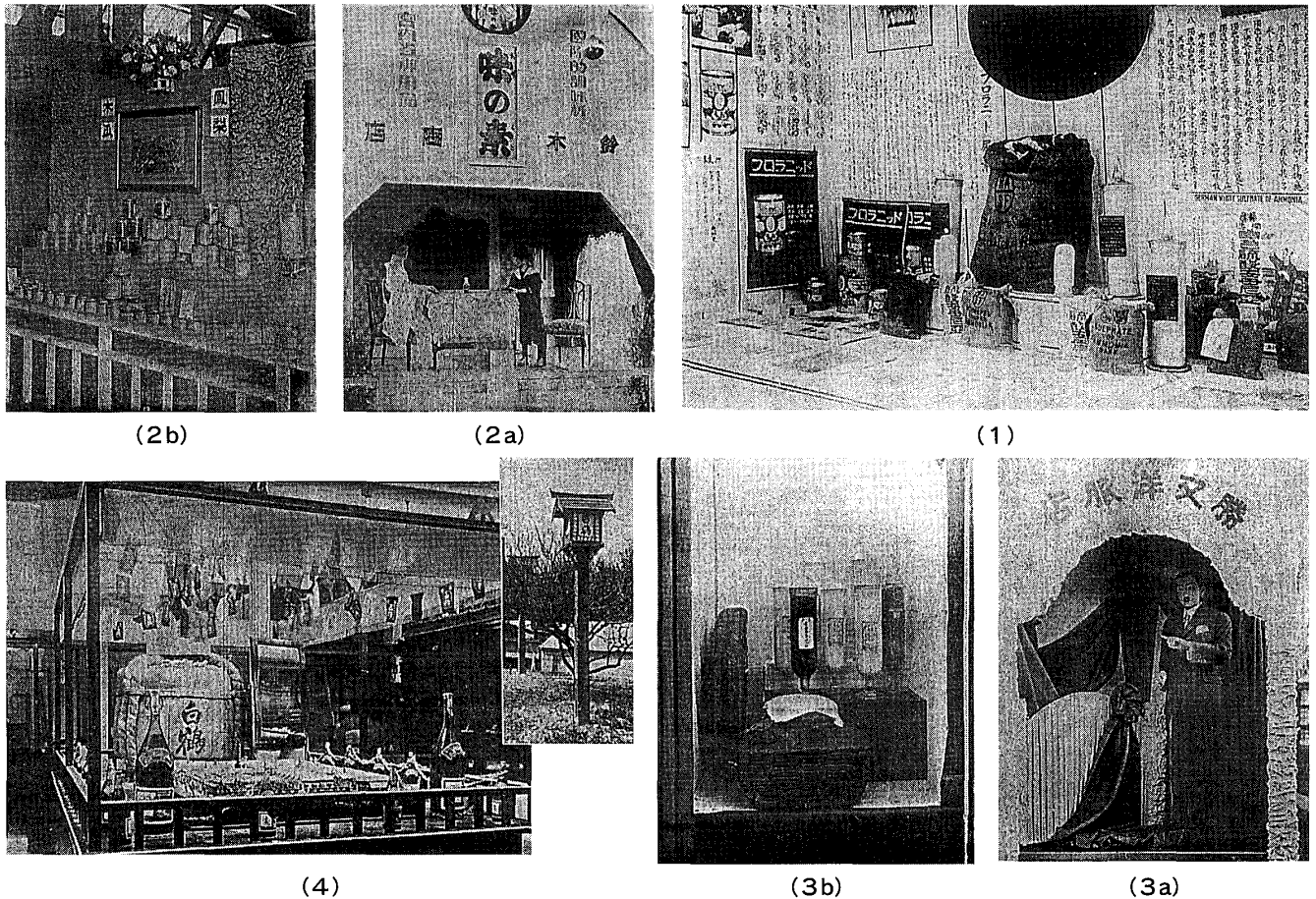
満洲を宣伝する営みは、これらのほかにもいくつかある。会期中には「満鉄週間」と銘打って様々な催しが開かれ、事あるごとに満洲の宣伝は繰り広げられていた。例えば、満鉄は満洲の地理、経済に関する簡単な10の質問を用意しておき、参観者の回答を募集する「プライズコンテスト」を実施し、入館者を獲得しようと努力していた。この試みは、懸賞品がでることもあって人気を博した。一等賞は満洲までの一等切符、二等、三等は白狐のコートや真珠であったから、かなり魅力的であって、入場者も多く、好評であった（河原茂太郎 1934：312-13）。しかし、総じて言えば、満洲側の展示では娯楽的要素が乏しかった。「満洲音楽の夕べ」として満洲国国歌の演奏をしたり、中学校の男女生徒のバンドによるオーケストラ演奏が館前で持たれることはあっても、それ以上の盛りあがりには欠けていた。「満洲芸術

写真展覧会」が開催され、満洲風俗の写真が展示される機会があっても（山下清秀 1934：71-75）、日本館がジャポニズムを売り物にして茶会の催しや真珠製品の展示などを試みていたのと比べて、満鉄館の存在は小さすぎた。茶や真珠に代表されるジャポニズムに匹敵するような満洲的な情念の展示は乏しかった。

3 大連勸業博覧会

中国の遼東半島の付け根に位置する寒村にすぎなかった大連の歴史は、近代史の流れに押されて、数奇な運命を辿ってきた。日清戦争後、日本の租借地になったこの都市は、歴史的に名高い三国干渉によって日本が撤退すると、ロシアの支配が及ぶようになった。ダルニーと呼ばれたこの都市は、ロシア統治のもとで一躍発展を遂げ、極東随一の自由貿易港として繁栄の道を歩むことになる。綿密な都市計画のもとで街並みは整備され、東清鉄道（後の南満洲鉄道）が開通し、大連は近代都市へと進むことになる。しかし、日露戦争後は日本の租借地になり、近隣の旅順を含め、この附近一帯は関東州として日本の行政機構に組み込まれていく。その後、1931年に満洲事変が勃発し、32年に満洲国が登場すると、日本の満洲統治の表玄関として位置づけられ、その中心的都市として成長していった。

大連に市制が実施されたのは大正4（1915）年のことであった。それから9年経過し、隣接都邑を合併した大連は人口も20万人にも達する勢いで、かくして大正13年には勅令をもって関東州市制が公布され、同年に施行された。これに伴い、25歳以上の男子による普通選挙が実施されることになる。当時の20万人ほどの人口のうち、日本人は7万5千人にすぎなかったが（井上謙三郎編 1936：16）、定員40名の市会議員のうち33名が日本人から選ばれることになり、残りの7名は民政署が選任することとし、中国人学識経験者から選ばれた（井上謙三郎編 1936：421）。この選挙は当時の大連の実情をよく表していて、従来の政商的地場企業家が姿を消し、弁護士、満鉄社員、ジャーナリストが多数、選出されるという特徴を持っていた（柳沢遊 1999：187）。



第13図 大連勸業博覧会での展示物の光景

- (1) : 神戸ハーレンス紹介出品の農産物肥料
 (2a) : 東京鈴木商店出品の味の素、(2b) : 三井物産出品の鳳梨と瓜
 (3a) : 大連勝又商店出品の洋服、と (3b) : 長春益発合の大豆製品
 (4) : 大連嘉納合名の清酒白鶴

本書ではそれぞれの写真ごとに説明がついている。例えば、右下の写真(3aと3b)の説明書きは次の通り。「大連磐城町勝又洋服店出品の洋服は技術の巧妙なるに観覧者の注目を惹く。長春益発合の豆粕、豆油、大豆等は我が満洲の特産物なれば是亦内地よりの観覧者等の注意を惹けり」
 出典：佐藤重成 1925

大正14(1925)年、この大連で新市制が施行されたのを記念して大規模な「大連勸業博覧会」が実施された。これが満洲における第一回目の博覧会であった。8月10日から9月18日までの40日間にわたり、新しい議員の企画のもとで大連市が主催し、関東庁と満鉄会社との支援を受け、「日華両国産業貿易の改良発達に資する」(大連市役所1926:5)という目的をもって行われた博覧会である。この開催に当り、大連市は中華民国に対して参加を呼びかけたが、上海での抗日デモの拡大により不参加になったいきさつがあり、結局、外国からの参加国はないままに行われた。日本の植民地・大連での博覧会は、こうした事情もあっ

て、博覧会会長は日本人の大連市長、主な博覧会役員もまた大連居住の日本人というように、大連の日本人政府関係者や実業界の主導で行われたという色彩が強烈であった。

会場内には日本の各府県からの出品のほか、朝鮮館、台湾館からも出品があり、それなりの規模を維持することができた。しかしながら、満洲からの出品はさしたる変わり映えのない産業特産物の展示が中心であった。「大連機械製作所特設館」では鑄鋼管、鑄銅など同社製の農具の陳列、「満洲石鹼特設館」では満洲原料による各種石鹼の実演製造、「満洲甘栄館」では満洲製菓業者が組織する甘栄会の商品見本、「満鉄館」では港湾、鉄

賞の対象になった（大連市役所 1926：273-290）。

大連勸業博覧会は満洲の地に咲いた最初の博覧会であり、娯楽大会でもあったことで、人気は上場であった。さらに、「福券付入場券」の登場はこの人気に拍車をかけた。当り籤を引いた幸運の人は一千円の景品が得られるということで、評判を呼んだのである。こうして、8月10日から9月17日までの会期中、博覧会へ足を伸ばす人々はかなりの数に上っていて、有料入場者を取り上げれば、日本人は492,104人、中国人（満系と漢系）は225,813人、外国人は1,709人、合計すれば719,626人であった。これに無料入場者を加えれば、入場者数は80万人に迫るほどの盛況ぶりであった（大連市役所 1926：292-94）。当時の大連市の人口が20万人程度であったのを思い起こせば、この数字は大きいと言わねばならないし、また日本人の見学者の多さにも驚きを禁じ得ない。もちろん、日本人の見学者といっても、この数字だけからは日本内地居住者か、在満日本人かははっきりしない。しかしながら、当時湧き起こった満洲熱を考えると、日本本土からの参観者も多かったに違いないという推測は十分に成り立つ。

日露戦争以後、多くの日本兵の犠牲を払った激戦地の旅順は、戦跡として追憶の対象になり、多数の日本人が訪れる観光地になっていたことはすでに述べておいた。観光用のパンフレットやリーフレット、そして旅行案内書が出まわり続けたのもこの頃からである。1920年代から40年代にかけて、戦跡旅順は日本人ツーリストの観光目的地として確立していた（荒山正彦 2001/2：6）。旅順に関わる絵葉書も大量に流通し、視角を通しての旅順像はしっかりと日本人の脳裏に焼き付けられた。二〇三高地、東鶏冠山砲台、白玉山の表忠塔、これら日露戦争を象る記念遺跡は一般大衆にとって馴染み深いものになった。こうして、旅順をからめた満洲の存在は日本人の生活の中に入り込んできた。

この博覧会の開催直前には、興味ある流行が広がっていた。その当時とは、いわば満洲ブームの登場した時代であり、満洲についての紀行文が盛んに書かれるようになった社会的背景があった。

明治42（1909）年10月21日から12月30日にかけて、「東京朝日新聞」誌上には夏目漱石による紀行文、「満韓とところどころ」が掲載されていた。評判が決してよいとはいえない文章ではあったが、後続の紀行文を産み出したことでは忘れることができない。それは、大正13（1924）年に大阪屋号書店から出版された田山花袋の『満鮮の行楽』であり、大連から旅順、奉天、ハルピン、長春、北京、そして朝鮮を旅した紀行文は、漱石よりもしっかりとした筆致で道中の風物が描かれていて、満洲旅行に心を奪われた読者には感慨をもたらす内容で満ち溢れていた。大連勸業博覧会が開催されたのは、それから一年も満たない時だった。

博覧会主催者もこうした満洲熱を利用するのに躊躇はしていなかった。大連勸業博覧会を支える満鉄は「満鮮周遊観光」を企画し、日本人客の確保に努めた。第15図は満鉄が関わる博覧会のパンフレットの一部分である。このパンフレットには大連勸業博覧会の案内とともに満洲各地の名所旧跡が写真入で簡潔に紹介されている。旅費が汽船3等料金でも94.35円と割高感があるものの²⁾、大連から旅順、奉天、撫順、朝鮮という旅程は田山花袋の辿った道のりと重なるところが多い。博覧会見学とは旅行気分を誘発する機会でもあった。

4 満洲大博覧会

1) 観光都市・大連

時代が昭和に移る頃、大連はおおきく変貌した。とりわけ、関東軍が勢力を強め、満洲事変、そして満洲国の成立を契機に満洲全体に日本の支配権が及ぶようになると、大連は日本を結ぶ港湾都市として重要性を増していく。人口も増加し、アジア有数の貿易港として成長した大連には人々の往来も頻繁になってくる。神戸と大連を結ぶ定期客船は大阪商船、大連汽船などがあり、大阪商船の場合、昭和6年には4隻が就航し3日おきの間隔で運行されていた。それが昭和7年、満洲国の成立以後、うすり丸、うらる丸、ばいかる丸、はるぴん丸、香港丸、亜米利加丸の6隻で隔日出航に増便された。各船とも神戸を正午に出航

2) ちなみに、大正15年の公務員の初任給は75円であった（週間朝日編 1981：159）。

進み、広大な蒙古（モンゴル）平原に感嘆し、ロシア文化の漂うハルピン、日本によって整然と都市区画された新京（現・長春）を訪れ、帰途には清朝発祥の地・奉天（現・瀋陽）を訪ね、石炭の露天掘りで有名な撫順を通り、朝鮮半島を南下して釜山に至り、下関で下船して29日に東京に戻るという、22日間の旅行日程であった。

この時の満洲旅行の旅費は一人270円と決して安くはないので、参加者は限られていたであろうが、それでも一般日本人にとって魅力的であったと思われ、この種の企画は毎年のように実施されている。そして、やがて満洲旅行は巾広い国民の期待を担う娯楽になり、専門の旅行雑誌『旅』には「満洲特集号」まで組まれるようになる。昭和14年8月号には「新満洲風土記」と題した特輯号が掲載され、満洲風物や旅行者の土産話が話題にのぼり、さらに戦時下の昭和17年3月号には、満洲国建国10周年を記念して「満洲特輯」が組まれている。満洲はさまざまな媒体を通して日本人の

日常生活に入りこんできたのである。

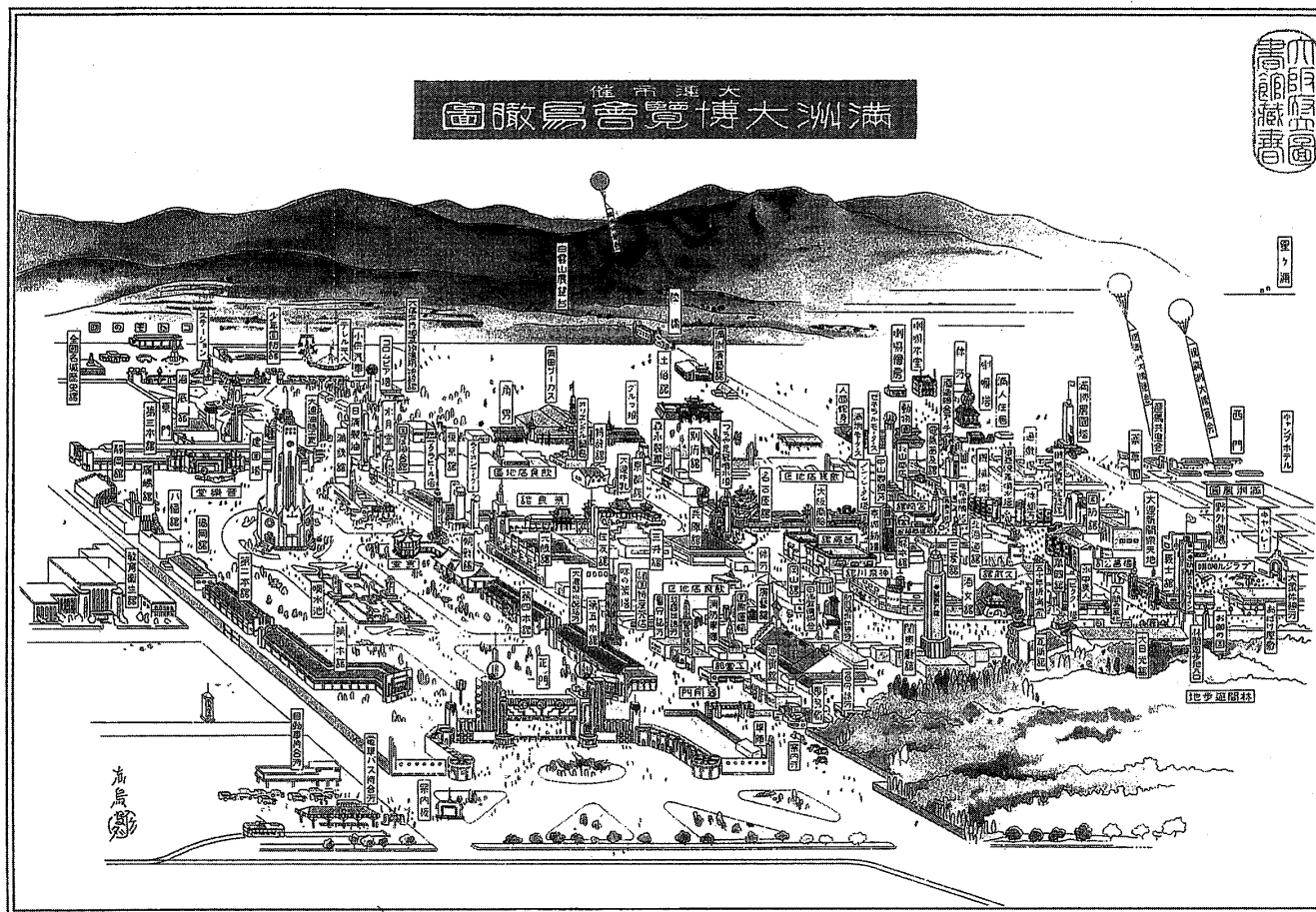
ちなみに昭和11年度の入出満旅客について、ジャパン・ツーリスト・ビューローの統計を見ると、個人旅客と団体旅客をあわせて30万人近くが、陸路、あるいは海路のいずれかの手段を使って満洲に来ていた計算になる（第1表参照）。その目的はいろいろあろうが、この数字自体は、当時（昭和10年末当時）の大連市の人口が362,808人であったのと比べると（井上謙三郎編 1936：16）、けっして少ない数字ではない。

こうした旅行熱が高まっていた頃、大連市は市西部の白雲山麓に35万坪の敷地を用意し、昭和8年7月23日から8月31日までの期間、ちょうど学校が夏季休暇中にあたる時期に市の特別事業として「満洲大博覧会」を開催した。主催者として大連市長と市議員が中核的役割を受け持ち、これらに加えて大連商工会議所などが支援し、組織は形成された。大正期に勸業博覧会を成功させた実績を持つだけに、昭和になって戦局が激動しはじ

第1表 満洲旅行の旅客数（昭和11年度）

経路別人員	一等	二等	三等	計
個人旅客				
日本より				
大連港經由入満	1,077	3,431	18,170	22,678
安東駅經由入満	620	4,234	44,021	48,875
北鮮線經由入満	22	1,047	40,738	41,807
通過旅客	—	—	—	552
航空路經由入満	—	—	—	412
支那より				
陸海路經由入満	6,453	11,759	136,558	154,770
通過旅客	—	—	—	294
航空路經由入満	—	—	—	105
其の他外国よりの通過旅客	—	—	—	1,848
小計	8,172	20,471	239,487	271,341
団体旅客				
日本より				
社線内旅行学生団体				9,342
社国線内旅行学生団体				5,710
社線内旅行普通団体				657
社国線内旅行普通団体				2,913
満洲里通過欧亜連絡旅客団体				399
支那より				
社国線内旅行学生団体				125
其の他外国よりの通過団体旅客				803
小計				19,949
合計				291,290

出典：ジャパン・ツーリスト・ビューロー編 1938『満支旅行年鑑』（昭和14年版）、81ページをもとに作成。形式を若干変えている。



第17図 滿洲大博覽會場鳥瞰圖

出典：加納節雄 1935（口絵図版）

めた時期とはいえ、主催者側の大連市は博覧会開催に自信満々であった。成立まもなくの満洲国の南端に位置する大連市は、日本との交通の要衝にあたるだけに、博覧会開催の大義名分として「日満両国の経済的提携」を謳っていて、「満洲」を極度に意識した博覧会が目指されていた。

当初、主催者側は満洲内だけではなく、日本からも多くの観光客を集め、博覧会観覧者を80万人と想定し、かなりの盛況を期待していた（伊佐壽編 1933a：82）。そのため、大連の宿泊施設の確保に全力を傾ける決意で博覧会の計画に取り組んでいた。大連市の旅館組合は、日本人旅客を収容できる旅館の収容能力は一日平均2千人と見積もっていたので（伊佐壽編 1933a：83）、大挙して見学者が押寄せた場合、果して収容可能か、ある程度の危惧を持っていた。しかしながら、蓋をあけてみればこの博覧会は不入りであった。実際の入場者は合計で470,142人にすぎず（伊佐壽編 1933a：675）、大正14年の大連勸業博覧会の入場

者数に遠く及ばなかった。

もちろん主催者側も事前の宣伝工作は怠らなかった。「風薫る大連と満洲大博覧会」と題したパンフレットを作成し、満洲はもちろん日本内地の関連機関に配布したし、有力新聞に広告を掲載するなど、客寄せの手建てはそれなりに工夫していた。満洲でもっとも人気のある祭礼、すなわち、旧暦の4月18日に行われる「娘娘祭」の機会を逃さず、主催者は宣伝に努め、この時に配布したビラや絵葉書などはかなりの量に達している。また、先の大連勸業博覧会で人気を博したひそみに習って、今回も会期中に「福券附入場券」を発行し、関心を引きつける工夫はしていた。しかし、期待するほどの成果は得ることができなかった。

それでも、日本からの訪問者として、銀行や企業関係者、新聞社などの報道関係者、地方自治体からの視察団と並んで、小中学校の修学旅行団が多く名を連ねていたことがこの博覧会の特徴の一つであった。例えば、7月24日、「大阪天王寺師

範学校生徒一行八十名、大阪天王寺商業学校生徒一行三十名、大阪浪速商業学校生徒一行六十名」が訪れている。それ以後も、『大連市催滿洲大博覧会誌』（加納節雄編 1935：679-86）を検索する限り、会期中に日本から20校ほどの修学旅行団が見学に訪れた。これ以外に、滿洲にある日本人学校の生徒の一団、そして各地の公学堂に所属する滿洲人生徒らも入れ替わり立ち代り団体で見学に来ていた。

なかでも、主催者は滿州国人の観光団の参加をおおいに期待していたようであり（加納節雄編 1935：686-88）、そのため、開催に先立って滿州国政府と旅行団招致に向けての協議にはいつている。滿洲各地からの滿洲人參觀者に対しては、博覧会見学が同時に滿洲についての知見を増す機会になることを期待し、標準的な旅行コースを設定し、宣伝していた。例えば、大連市に滿三日間の滞在を組み、第一日は博覧会見学にあて、第二日は市内見学をし、第三日は自由行動とし、「甘井子—鉄道工場—埠頭—滿蒙資源館」の四箇所の見学を行うというように、標準的な観光日程を推奨することで博覧会見学の成果を期待し、その意義を強調していた。

大勢の參觀者を集めるため特別の仕掛けも提供された（第2表）。8月15日を「滿州国デー」と設定し、種々の行事を実施したのはその一つであった。日滿実業家の懇談会³⁾、各種余興、日滿学生交歓の夕、埠頭にて日本軍艦の見学、こうした種々の段取りを用意して博覧会を高潮させようと、主催者側がこの日に注いだ意気込みは激しかった。これら一連の滿州国の色彩が濃厚な催し物は滿洲在住の觀客を呼ぶはずであった。しかしながら、天気は晴れであったが、平日のせいもあって、入場者数は14,000人程度（伊佐壽編 1935：687）にすぎなかった。滿洲大博覧会の人気のなさはこうした面にも表れていた。日本の精神文明を体現した博覧会と強弁しようとも（小山貞知 1933：350-52）、この博覧会は失敗だった。

2) 博覧会の概要

滿洲大博覧会の開催趣旨は建前上、「滿洲建国祝賀記念」を名乗っていたが、その顔は複雑であった。滿洲国はどう言おうとも日本の傀儡国家であり、日本の後ろ盾がなければ成り立ち得なかった。このような背景を持つ滿洲の博覧会開催は、誰に向って展示内容を発信するのかと問われた時、少なくとも二つの顔を持ち合わせなければならなかった。一つは地元の滿洲の住民に対する顔であり、他の一つは宗主国日本へ見せる顔である。しかしながら、地元の滿洲住民といえども、民族構成は複雑で、当時の国是であった標語、「五族協和」という言葉に合わせて言えば、日（朝鮮を含む）、滿、漢、蒙、露の多種にわたっていたし、日本人といえども、滿洲という辺境に住む限り、内地に住む日本人とは差異化された存在であった。

滿洲は日本国内で開催される主要な博覧会にいつも参加し、台湾・朝鮮と同じく植民地の一員という立場から展示を行ってきたことはすでに見てきた。植民地・滿洲を代表する展示は日本の出先機関としての滿洲国政府、あるいは滿鉄が責任を持っていて、そのために出展に際しては植民地・滿洲対宗主国・日本という二項対比の枠組みを前提にしての参加にならざるを得なかった。例えば、冒頭に紹介した名古屋汎太平洋平和博覧会では、工業国・日本対原料供給国・滿洲という枠組みにしたがっての展示に終始していた。この両者の関係は極端に不均衡であった。なによりも、滿洲を代表する展示は日本の嗜好に合わせるかのように選択されていた。滿洲は資源の供給国にすぎず、それ以外は何もないかのように仕組まれていたのである。

ところが、滿洲大博覧会のご当地・滿洲で開催されただけに、これまでの植民地対宗主国という二項対立的な方式をそのまま踏襲することはできなかった。第一に、植民地であることを自覚しながら、同時に滿洲の独自性を強調しなければなら

3) 滿洲大博覧会開催中、日滿の実業家が懇談会を持ち、経済関係について討論する機会もあった。懇談会では6つの分科会が持たれた。第一分科会は交通・通信、第二分科会は財政・金融、第三分科会は貿易・商業、第四分科会は工業・企業、第五分科会は資源、第六分科会は政策であり、各分科会では滿洲の抱える経済問題がかなり突っ込んで議論され、滿洲国経済建設協力に関する決議とともに、「日滿実業協会」の設立が決められた（伊佐壽編 1933b）。

第2表 満洲大博覧会での各種催し一覧

各種デー実施表

種 別	月 日	摘 要
満博おけさデー	七月二十九日 自八月十一日	満博主催に協賛 博覧会有料入場者に毎日五千人を限り一人に付電車往復乗車券一枚宛を進呈す
第一回協賛会デー おけさの夕 盆踊の夕 演芸館デー	至同十五日 八月十二日 同十四日 自八月十二日 至同十四日	演芸館有料入場者に博覧会夜間入場券一千枚を進呈
天勝デー	自八月一日 至同七日	同上三千枚を進呈 同上入場券を進呈
捨丸デー 第二回協賛デー	八月十三日 八月二十三日 同二十三日	同上入場券を進呈 演芸館有料入場者に博覧会夜間入場券、電車往復乗車券、 絵葉書を進呈
子供角力		角力出場者に電車往復乗車券二千枚を進呈

出典：伊佐壽編 1933a：49（書式を若干変更している）

その他の主な催物

福引デー（8月6日）：一等の景品は応接室西洋家具椅子一式。

国防デー（8月13日、14日）：編隊飛行と空中模擬戦、市内宣伝行進。

満洲国デー（8月15日）：記念式典。午後から満洲演芸館、音楽堂にて余興。夜には「日満学童交歓会」の余興。満洲側小学校生徒による舞踊、独唱。

宝探しデー（8月24日）：一等の景品は桐桑縁三つ重簞笥一棹。

子供デー（8月25日）：学童の童謡、舞踊。

第二回福引デー（8月30日）：一等の景品は三越の商品券（三百円）。

市民デー（9月1日から3日間）：閉会後に行われ、会場施設の無料観覧。

生花茶の湯大会（会期中）：生花の観賞と茶室での抹茶のサービス。

馬匹共進会（8月10日から15日）：関東州畜産連合会による馬匹改良奨励と馬事思想奨励のため。

全満写真美術展覧会（8月15日から22日）：満洲色豊かな作品を全満洲から募集。

喇嘛（ラマ）祭事（8月18日）：奉天黄寺のラマ僧、5名による大乘経の念誦。

軍用犬共進会（8月26日、27日）：軍用犬の高等訓練の実演。

天后宮祭事（8月28日）：楽士を先頭に道士・信徒による街頭遊行の後、道士による読経。

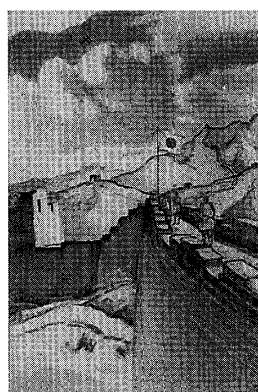
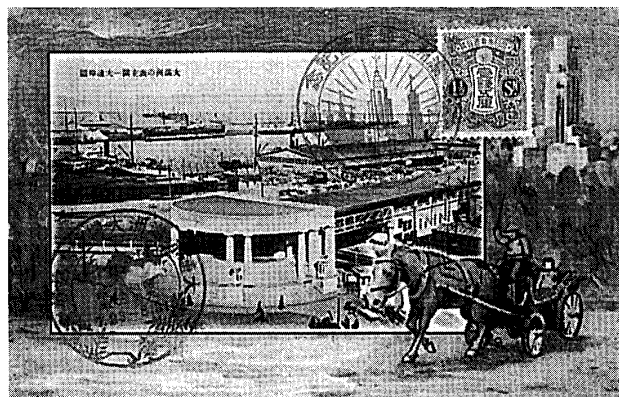
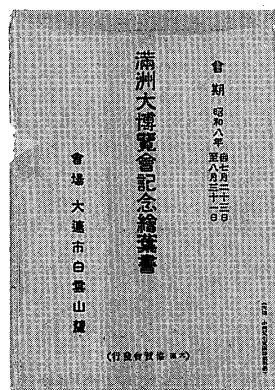
出典：加納節雄 1935：731-61。

出典：加納節雄 1935（『大連市催満洲大博覧会誌』から作成）。

なかった。加えて、満洲在住の人口構成は複雑であり、文化も多様であるという実情があった。このため、独立国家としての立場から、博覧会主催者としての満洲の日本人が、その複雑性、多様性に富んだ実情を宗主国の日本人に訴え、新しい満洲像を見せる必要があった。しかも、その満洲は年々、国力が発育しているという認識を主催者は持っていたので、その発展ぶりを日本人に見せる必要があった。第二に、主催者としての満洲の日本人は、統治者としての立場から博覧会を開催し

ていた。そこで、非日系の満洲国人に対して宗主国の産業の発達を見せつけ、植民地としての従属的立場を認識させる必要があった。このため、日本各地の都道府県から近代産業の成果を誇る出品を多く寄せられることを期待していた。こうして大連市で開催された博覧会では、日本と満洲との双方に向って、異なった顔を見せる工夫が必要とされたのである。

博覧会場には多くの建築物が立ち並んでいる。会場正面の大広場中央には高さ40メートルにも達



第18図 満洲を表象する絵葉書（1）

満洲大博覧会では大量の絵葉書が発行された。会場の建物を紹介する絵葉書が多いなかで、満洲の風土を表象する絵葉書も見られる。モンゴル人の住む牧歌的な原野、きれいに着飾った満洲族女性、こうした満洲は強力な日本軍の守備隊によって守られていたことを絵葉書で伝えている。

出典：山路所蔵品

第19図 満洲を表象する絵葉書（2）

満洲大博覧会の絵葉書では、満洲は広大な大地、歴史的景勝地、産業の集積地としても表象されていた。

出典：山路所蔵品

する巨塔、建国館が聳えている。その内部には、「満洲人少女、日本人少女を迎える場面の等身大人形」が置かれ、日本あつての満洲国という実情が如実に表現されていた。しかしながら、この博覧会は満洲国存在の合理性を訴えるという別の顔を見せなければならなかったため、工夫が必要とされた。皇帝溥儀の写真を掲げ、四面の壁には満洲国執政府の全景を描き出したほか、野趣がみなぎった森林の豊かな風景、郷土色豊かな「娘娘祭」の光景、歴史的建造物としての熱河離宮などの写真もまた飾られることになった。この場面では、自然そのものと歴史遺産や伝統文化が満洲国を表象するものとして選ばれていたためである。とはいっても、型通りの満洲を資源供給国とみる態度に変更が加わったわけではない。満洲の「国都建設計画図」が示され、満洲の現勢模型とともに鉱物資源や農産物の出品をやはりここでも見るこ

とができる。

展示会場は大きく分けて、本館、別館、特設館と特設物とから成り立っている。満洲大博覧会では、内地各府県や台湾・朝鮮などの植民地、さらに企業などが出資して独自の会場を特設館として開設することが認められていたが、その特設館を建設する資金のない出資者や府県は広大な面積を持つ本館内の空間に展示場を設定せざるを得なかった。その本館は五棟の建物からなり、第一、第二、第四、第五本館は日本各地からの出品物を展示し、第三本館は大連市内から寄せられた個人的出品物を陳列していた。大連市内からの個人的出品物は118件にのぼっていたから、かなりの商工業者が参加していたことになる。

別館には建国館、機械館、貿易館、建築館、国防館、教育衛生館、土俗館が建てられていた。機械館では、東京、大阪、名古屋、神戸、大連などの全国有数の会社や大商店が出品し、近代科学の所産たる最新式機械を展示していた。古河電気工

業会社の電気機械類、浅野物産のボイラーのほか、ストーブ、オートバイ、タイプライターなどが展示されていた。大連市からの出品としては、大連機械製作所の鑄鉄管があった。貿易館は日用品類の見本、満洲の銀行券、貿易統計図表などが展示され、建築館はレンガ、建築用材、浴槽、便器、家具、絨毯など家屋附属の用品が並べられた。教育衛生館の展示は教育、衛生、スポーツに関する資料が中心であった。

この博覧会が開催された時期は満洲事変の直後であり、その世相を反映して軍事色の濃い展示も目立っていたのが特徴であった。第一に国防館の出展会場の面積が259坪と著しく広がった事実は軍事優先の感触を強めたし、また陸軍と海軍の出品の規模自体が大きかったことも一つの特徴を示している。それらの出品物としては、将兵の制服や機関銃、歩兵銃、迫撃砲など関東軍の兵器、そして海軍からは潜水艦の魚雷発射模型などが展示された。さらに、殉難した満鉄社員の遺品も出展され、会場はあたかも戦争を追憶する記念会場に様変わりしたような印象を与えていて、参会者の国防意識を喚起させる役割も果たしていた。

特設館には、福岡館、広島館、静岡館、朝鮮館、大阪館、東京館、奈良館、京都館、愛知名古屋館、兵庫館、台湾館、熊本館、北海道館、宮崎館、関東庁館、神奈川館、岡山館、満鉄館、住友館、三菱館、三井館、電気普及館、瓦斯(ガス)館、京城紡織館がある。大勢を言えば、日本内地各県と大企業からの出品が優勢であった。

このように全体を概観してみると、当時の日本各地で開催されていた博覧会と比べて決して見劣りするものではなかった。ただし、展示は先例を模して形式化されていた事実は否定できず、さして新鮮味を覚えるものではなかった。こうしたなかで、ひととき目だった展示は土俗館の存在であった。

3) 土俗館の展示

満洲大博覧会の大きな特色は、土俗館を開館させることで「満洲地方色を盛る」(加納節雄編 1935:538) 試みがなされたことであった。今までに行われた日本内地での博覧会で、この種の展示を満洲館が提供してこなかったことを考える

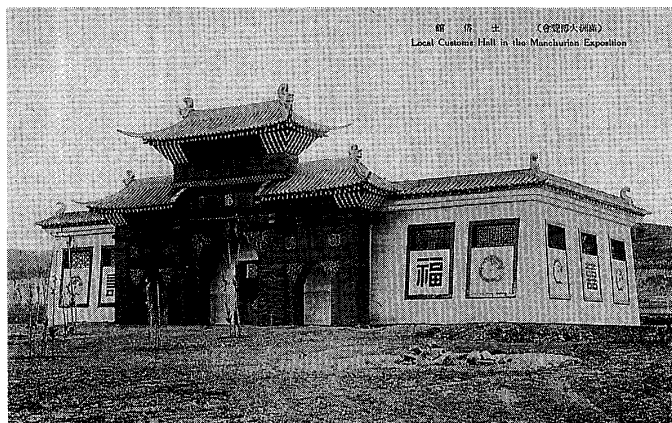
と、その意義は高いと言わなければならない。土俗館ということで展示の対象になったのは、多種にのぼる諸民族の生活文化である。その生活文化は満洲各地から集められ、その種類も多方面にわたっていた。

展示物のなかには、満洲地域で使われていた「度量衡」に関わる諸道具があった。これは大連工業博物館から借用されたものである。大連市役所の所蔵品として、神像や祭祀道具、そして出産や誕生などの通過儀礼に関わる装束が展示された。会場ではまた、撫順高等女学校所蔵の風俗人形が並べられ、また道教やイスラーム教の寺廟の写真も飾られた。こうした展示と並んで、満(満洲)族、漢族、モンゴル族のほかに、満洲に居住する少数民族、オロチョン族やソロン族などの生活文化も展示され、チベット仏教やシャマニズム関係の展示も彩を添えた。

少数民族のオロチョン族は大興安嶺に居住し、鹿などの大形野獣を主要な食料原としていた狩猟民である。土俗館での展示資料は、主に哈爾濱(ハルビン) 東省文物博物館が所有していた秘蔵品を借用したものであった。そのなかでは、猟装の鹿オロチョン人形(等身大)がひととき目立ち、猟帽(猟の時、偽装して鹿に近寄るため用いる鹿の角を附けた帽子)、固有猟銃、朝鮮式猟銃、パイプ、白樺皮製の水桶、塵取など生活用品が中心として並べられていた(満洲文化協会編集部 1934:25-69)。

ほかに、ダウル族関係では衣装、男子用の靴、婦人靴、化粧品入れが並べられ、モンゴル族関係では櫛、腕輪からはじまって各種日用品が展示された。満族では風俗人形、とくに満族旗人の盛装女子人形が飾られ、満族の礼装絵姿が人目にさらされた。

宗教関係でもおおがかりな展示が行われている。奉天黃寺秘蔵の千手千眼仏画像が出展されたほか、道教やイスラーム寺院の写真が飾られ、満族の民間信仰の神々と祭祀道具が陳列された。さらに、ソロン族、オロチョン族、ダウル族、ゴルディ族など、それぞれのシャマンの写真が飾られ、また、朝鮮からは朝鮮巫の巫女帽、衣装、鼓、鈴、神刀、鏡などの祭具、そして神像が寄せられた。朝鮮シャマニズムに関する資料の多数



第20図 土俗館の外観（絵葉書）

出典：山路所蔵品

は、朝鮮の京城帝国大学から提供されたものであって、その出展には京城帝国大学の秋葉隆が深く関わっていた。秋葉は博覧会での展示指導のため、実際に大連にまで来ている⁴⁾。

こうした土俗品の展示に中心的役割を担った人物は、満鉄社員の小林胖生であった。小林は、考古学や民俗学に関心を持ち、いくつもの論文を発表し、活躍してきた在野の学者であって、その知識と経験を生かし、博覧会での展示に関わったのである。このため、結婚と出産、誕生など、満族の通過儀礼の説明が展示会場では詳細に示されている。いわば、婚姻儀礼や出産儀礼について詳細に語っている場面は、一種の民俗学概論の形式をなしていたほどで、「求子」にちなんだ吉祥絵や喜字の展示は満（洲）族の通過儀礼を知るうえで参考になる（小林胖生 1934a：52-58）。こうして、大連市催満洲大博覧会は満洲の風物を民俗学的に紹介するのに貢献した。だが、そうした民俗学的手法をのぞかせる一方で、小林は別の思惑を抱いていたようである。

小林は、民間信仰のなかでも、洞窟の中に祀られる「胡仙」と呼ばれる独特の信仰を取り上げている。この民間信仰を取り上げることで、小林は「日本の稲荷神と相似た点のある事」に注意を促している（小林胖生 1934b：61）。小林にとって、満洲の民俗は日本の民俗学との接点のなかに存在していた。巫について、南満洲では「支那服

の上に五彩の紐を垂れた袴を纏い、腰鈴を腰に帯び、鈴と一厘銭を通した神鼓を叩いて祭文を読み、加持祈祷をなすのは、日本の神祭と全く一致している」（小林胖生 1934b：60）と解説している。満洲の民間信仰の多様な状況を概説的に示し、民俗研究の意義を促すとともに、日本の民間信仰との類似性を暗示させる目的で、小林の展示は企てられたようである（小林胖生 1934b：58-64）。

とりわけ、小林の興趣はシャマニズムの展示にあった。京城帝国大学からのシャマニズムの資料を取寄せた理由は、東アジアの比較民俗学研究に一役買おうとしたからにほかならなかった。小林は、こう述べている（小林胖生 1934b：60）。

日本の巫や神下し系統のものと密接な関係があるのに、満洲シャマニズムの研究が遅れていることは遺憾に堪えない。そこで、京城大学の厚意によって資料を借入れ、日鮮満の比較をなし、多少なりとも、民俗学の上から我々日、鮮、満、蒙の諸民族は宗教的に相互的關係のあることを知らせて一般の注意を惹かんとしたのである。

満洲大博覧会の一角で行われていた、この一風変わった民俗展示について批判を投げかけることは可能である。東アジアのなかで日本の民俗行事を比較研究しようと見せた小林の意気込みは、それなりに評価できる。しかし、不用意にアルタイ系諸族のシャマニズムと日本とを比較することには飛躍がある。この飛躍を埋めることなしに展示することは、日本と満洲との文化的関連を短絡的に参観者に刷り込ませる結果になりかねず、政治的意図をも感じさせてしまう。主催者にしてみれば、普段使われている生活用具をそのままのありさまで陳列しただけなのかも知れない。けれども、この展示にはオロチョン族など地元の人たちの意見が反映されておらず、小林胖生の趣向がおおきく関わっていたのであって、日本人の観点に立った展示にすぎないという批判はまぬがれない。

4) 人類学者の秋葉隆が満洲大博覧会の展示に深く関わっていた事実は確かめられる。雑誌『満蒙』14-8（160号、1933年）の「協会記事」によると、7月11日、「大連市催大博覧会への用事を以て来連せる京城大学教授秋葉隆氏の歓迎座談会を満洲文化協会内に開き終って共和楼に歓迎宴を催した」とある。

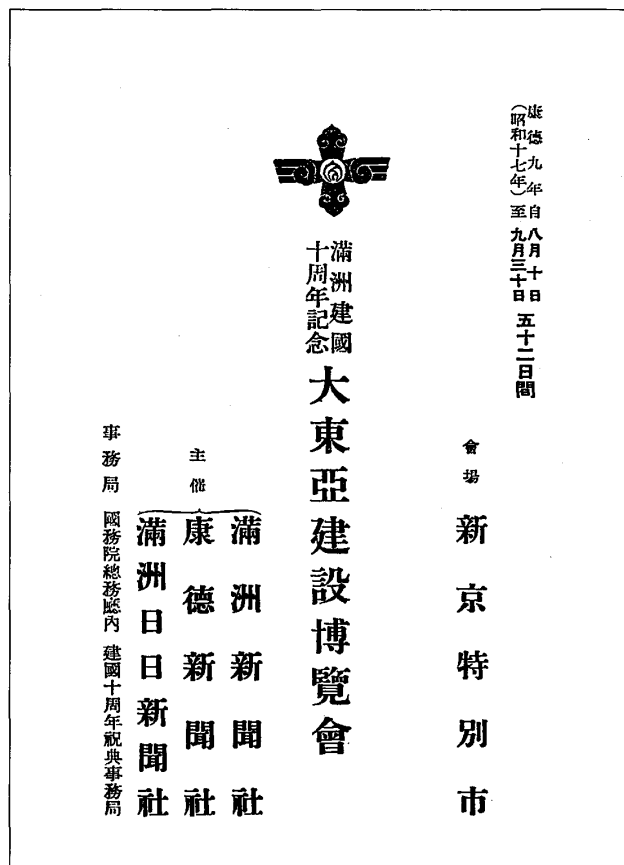
しかしながら、当時、オロチョンなどの少数民族を含め、東アジアの民俗学を唱導することなどは少数者の意見にすぎなかったことを思えば、この小林の試みはまったく無意味であったわけではない。土俗館の建物面積は90坪であり、貿易館が128坪、国防館が259坪、建築館が160坪であるのと比べて決して広くはない敷地であったが、そして細々として陳列したという印象を与えているにしても、満洲地域の「民俗学小辞典」という体裁を整えていたのである。意識していたわけではないだろうが、「五族協和」という当時の政治的スローガンに囚われず、多様性に満ちた満洲を世間に知らしめようとする努力が片隅ではなされていたことは知っておいてよい。これは、植民地でなされた博覧会での一つの見識であった。

5 大東亜建設博覧会、そして終焉

満洲での博覧会はその後、昭和17（1942）年にも満洲国の国都になった新京（現・長春）市で開かれている。満洲国建国10周年を記念して行われたこの博覧会は「大東亜建設博覧会」と命名され、満洲新聞社、康德新聞社、満洲日日新聞社の主催で8月10日から52日間にわたり開催された。この時にもオロチョン族をはじめ様々な民族の生活用品の展示が試みられているが（鹿間時夫1942：27）、日米戦争の激戦中の開催であり、題名のつけ方から分るように大東亜共栄圏を鼓舞するための宣伝じみた博覧会であった。

この3年前にも兵庫県西宮市にあった西宮球場で、同じ題名の博覧会、大東亜建設博覧会が行われたことがあった。時期は中国での戦争が深みに入り込んでいた頃であって、武漢攻略を成就した光景を映し出す大パノラマが人気を呼んだ催しであった。新京での博覧会も似た趣旨に立っていて、戦争遂行を旗印にしていた。「大東亜戦争館」をはじめ、「兵器陳列場」が設けられ、戦時色に満ちた博覧会であった。

こうした満洲の関わった博覧会は、結局、昭和20年で幕を下ろすことになった。後には何も残らず、宴の後はすべてが忘却の彼方に流れされてしまった。そもそもの始まりから何事も存在しなかったように歴史の闇へと姿を消してしまい、今



第21図 「満洲建国十周年記念大東亜建設博覧会」のパンフレット

出典：山路所蔵品

日では人々の記憶に残ることもなかったのが、こうした満洲の関わった博覧会であった。

引用文献

荒山正彦

2001/2 「戦跡とノスタルジアの間に：〈旅順〉観光をめぐる」『人文論究』50-4, pp. 1-16.

伊佐壽編

1933a 『大連市催満洲大博覧会協賛会誌』, pp. 781、大連市催満洲博覧会協賛会。

1933b 『日満実業懇談会紀要』, pp. 516、満洲大博覧会協賛会。

井上謙三郎編

1936 『大連市史』, pp. 870、大連市役所。

加藤徳三郎（日本緑茶販路拡張聯合特別委員会）編

1934 『市俄古進歩一世紀万国博覧会記念写真帖』, pp. 42、静岡市：日本緑茶販路拡張聯合特別委員会。

加納節雄編

1935 『大連市催満洲大博覧会』, pp. 781、大連市役所。

河原茂太郎編

1934『市俄古進歩一世紀万国博覧会出品協会事務報告』、pp. 458、市俄古進歩一世紀万国博覧会出品協会。

京都市役所

1929『大札記念京都大博覧会誌』、京都市役所。

高媛

2002「〈楽土〉を走る観光バス：1930年代の〈満洲〉都市と帝国のドラマトゥルギー」、『岩波講座近代日本の文化史6』、pp. 217-253、岩波書店。

小林胖生

1934a「結婚と出産、誕生」、(満洲文化協会編集部「満洲土俗資料と満洲大博覧会」所収)、『満蒙』15-1：52-58。

1934b「民間信仰雑記」、(満洲文化協会編集部「満洲土俗資料と満洲大博覧会」所収)、『満蒙』15-1：58-64。

小山貞知

1933「満博の収穫：世界への脅威一つ」『満洲評論』50-10：350-52。

佐藤重成編

1925『大連勸業博覧会記念写真帖』、大連：大連勸業博覧会出品協会。

鹿間時夫

1942「オロチョン紋様考」『民芸』4-12：26-36。
ジャパン・ツーリスト・ビューロー編

1938『満支旅行年鑑』〈昭和14年版〉。

週間朝日編

1981『続・値段の明治大正昭和風俗史』、pp. 263、朝日新聞社。

大連市役所

1926『大連勸業博覧会誌』、pp. 431、大連勸業博覧会協賛会。

富山市役所

1937『富山市主催日満産業大博覧会誌』、富山市役所、長岡哲三(日本中央蚕糸会)編

1934『一九三三年市俄古進歩一世紀万国博覧会参加出品事務報告』、pp. 84、東京：日本中央蚕糸会。

満洲文化協会編集部

1934「満洲土俗資料と満洲大博覧会」『満蒙』15-1：25-69。

柳沢遊

1999『日本人の植民地経験』、pp. 376、青木書店。

山下清秀編

1934『進歩一世紀市俄古万国博覧会満洲出品報告書全』、pp. 106、進歩一世紀市俄古万国博覧会満洲出品参加残務整理事務所。

満洲大博覧会関係パンフレット類(雑誌記事は除く)

品田直知 1933『満洲風物写真帖 附満洲大博覧会写真』、大連市催満洲大博覧会。

満洲大博覧会協賛会 1933『満洲大博覧会案内』、pp. 40、満洲大博覧会協賛会。

満洲大博覧会協賛会演芸館 1933『芸妓舞踊プログラム』、pp. 8、満洲大博覧会協賛会演芸館。

満洲大博覧会大阪協賛会 1933『日満交易最捷徑 大阪』、満洲大博覧会大阪協賛会。

満洲大博覧会愛知県名古屋市共同出品協会 1933『満洲大博覧会愛知県名古屋市出品案内』、pp. 29、満洲大博覧会愛知県名古屋市共同出品協会。

『満洲国情視察団募集』、1933年、ジャパン・ツーリスト・ビューロー。

関連する博覧会関係パンフレット

『大典記念博覧会満洲館案内』、1915年、満洲館事務所。
『平和記念東京博覧会満蒙館出品物解説書』、1922年、pp. 44。

『大札記念京都大博覧会満蒙参考館出品物解説書』、1928年、pp. 28、『名古屋汎太平洋博覧会満洲館』、1937年。

『満洲建国十周年記念大東亜建設博覧会』、1942年、新京市。

『大連勸業博覧会見物と満鮮周遊観光の栞』、大連勸業博覧会、1925年。

その他、満洲関連パンフレット

『満洲旅行案内』、1925年、南満洲鉄道株式会社。

『大連観光』、1938年、大連都市交通株式会社。

付記

本稿作成にあたっての資料収集に際し、「関西学院大学個人特別研究費」(平成17年度)から経費の一部を充当している。また文献の一部について乃村工藝社(寺下勅コレクション)所蔵品を利用している。感謝したい。

How Manchuria Displayed Itself in Colonial Expositions

ABSTRACT

In its efforts to appeal the success of Japanese colonial policies, the Empire of Manchuria joined in various kinds of expositions held in Japan since the *Taisho* period. The main purpose of joining in these expositions was to display the rich mining and agricultural resources of Manchuria. Under colonial rule by the Japanese militarists, Manchuria was a country situated as a provider of natural resources for Japan.

Manchuria had another opportunity to represent itself by showing a different culture from that of the Japanese. When the Chicago world exposition titled “a century of progress” was held in 1933, Manchuria joined in this fair to declare itself as an independent country, displaying its historical and cultural heritage as different from the Chinese and Japanese.

In 1934, a unique exposition was held in Dalian (Dairen in Japanese) of Manchuria. In this exposition, not only mining resources but also native folk customs, such as shamanism of the Mongols, Orochen, or Koreans, were displayed as a part of Manchurian culture. Thus, Manchuria showed complicated features in each exposition.

Key Words: colonialism, Manchuria, Exposition